

「地元回帰」へ 受け皿の充実を

野村アセットマネジメント株式会社 顧問

稲野和利さん

Kazutoshi Inano



経歴

神奈川県出身。栄光学園高校卒業。東京大学法学部卒業。1976年、野村証券株式会社入社。野村アセットマネジメント株式会社取締役社長、野村ホールディングス株式会社取締役副社長兼Co-CEO、野村証券執行役員副会長、野村アセットマネジメント取締役会議長・代表執行役などを経て、2013年、日本証券業協会会長、17年、同協会会長を退任。同年7月から現職。64歳。
公益社団法人経済同友会副代表幹事、一般社団法人投資信託協会会長、公益社団法人日本証券アナリスト協会会長を歴任。夫人は現・静岡市清水区出身。
<https://www.nomura-am.co.jp/>

静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

「軸足」とのバランスが重要

証券会社最大手の野村証券入社と同時に静岡支店に配属された。経営首脳としてグループをけん引。昨年6月まで日本証券業協会会長を務めるなど、証券界の顔でもあった。

リーマンショックなどで揺れた激動期をマーケットの最前線で経験してきただけに、企業・仕事観には説得力がある。「企業」というのはずっと存在し続けることに

意味があると思います。そのためには、常に社会との距離をはかりつつ、顧客から評価される商品やサービスを提供していく必要がありますよね。そういう中で経営者というのも、将来の道筋を構想し、レールを敷いていく、そういう繰り返しだと思います。難しい問題を抱えながらも、将来に向けて何かをしていく、行動をするということはやり続けていかないとはいけませんね」と明快だ。

東京でビジネスをする際も、「移り変わ

りの激しさに注目しながら、新しいものを求めることは大切だと思いますが、一方で軸足をどこに置くかが重要なのではないのでしょうか。移ろうものと自分自身の根っことのバランスをどうとるかだと思っんです。東京という空間は根なし草のように遊ぶことを許すし、それで生きていきますけど、ふっと気がついたときに自分分は一体何なんだったのだというように寂しい思いはしてほしくないですね。」

集客の「仕掛け」検討を

静岡と公私にわたる縁ができて40年余。「人口流出が言われていますが、意欲に燃えた若者が進学や就職を機に東京とかに出ていくのはある意味否定できない」としながらも、「今は転職がわりと起る社会になっています。地元についても戻ってこれるよう、社会生活を送る上で魅力を高めて、キープされていることが必要でしょうね」と指摘する。

「以前と比べ清水のまちが随分さみしくなりました」と残念そう。「いろんな人が集まる仕掛けを多角的に検討してみたらいかがでしょう」。スポーツを例に挙げ、「サッカーは清水エスパルスがあります。プロ野球球団があってもおかしくないですよ」。静岡地区には草野球チームだけでも20以上あるとされ、熱烈的な野球ファンは多い。

(文・写真…長田義明)